(From page 13)

that is, the "relationship of involvement" that has become an issue. This issue of "involvement" is the keyword for the new "culture of philanthropy" in Japan.

Saburo Yagi — The Path Towards Normalization (34) Caregiver System in Denmark

Denmark's policies on facilities for people with disabilities are based on normalization, taking decentralization, deinstitutionalization, localized transition, and integration as its basis. "Quality of life, respectability, individuality, and individual care" are the main themes.

Those with severe levels of disability require assistance for various activities (eating, excretion) in everyday life. This caregiver service is provided in the form of a yelper system. More specifically, the level of assistance differs based on the level of disability, daily life routine, and individual personality. The person with disability hires a caregiver based on the level of necessary assistance and receives support in order to sustain a lifestyle. In the yelper system, hiring and firing of caregiver, employment format, and employment record must all be managed by the employer, the person with disability; thus, management skills become necessary. In addition, social activities such as education, work, and volunteer activities are required.

Juri Kaneko — Contemporary Religion and Women (1) The Aims of "Religion and Gender" Studies

To recast religion from the perspective of gender is not simply to critically evaluate religion but also connects to ways to open up the possibilities for religion. The relationship between religious studies and gender research, according to Ursula King, is in the condition of a "double blindness." The myth of academic "objectivity and neutrality" has structurally excluded "experiences of women." In the field of religion, such myth is being critically transcended by women scholars of religious studies.

新連載執筆のねらい

「おさしづ」語句の探求

澤井治郎

「おさしづ」は「現実的な種々の心構えを教示」されたものだとされる。したがって、その教示の範囲はあらゆる生の場面におよんでいる。その教えの展開のなかで、現在、天理教において当たり前のように使われている言葉がいかに用いられ、どのような意味が込められているかを探求しようとするのが、本連載の意図である。さしあたっては、「道」に注目して考察する。「道」と「天理教」は同様の意味で使われているような用例も多いが、事典の意味をみれば少なからぬ相違がある。「おさしづ」では「道」はどのように用いられているのか、整理しながら探求していきたい。

ライシテと天理教のフランス布教

藤原理人

筆者はフランスにおいて天理教の布教活動に従事しているが、各国にそれぞれの事情があるように、フランスにも独自の宗教性が存在しており、それを理解することは当地で異国の教えを伝えるために非常に重要なポイントになると考えている。筆者が問題にする宗教的特殊性はライシテと呼ばれており、現代フランスのもっとも重要な考え方の一つと言ってもよいほど社会に浸透している非宗教性のことである。このライシテがいかに形成され、フランス人の思考を左右し、現代社会にどのような問題を投げかけているのか、様々な視点から考察を加えていくのが本稿のねらいである。しかしながら政治や社会問題を通してフランス現代社会の様相を描き出すことが目的ではなく、現代フランス人の宗教感情、宗教的情操に迫ることに焦点を合わせたい。現在進行形の問題でもあり、最終的な結論が導き出せるとは限らないが、フランス人の宗教観に近づく上で一つの指標となれば幸いである。

地域福祉を拓く　―新たな寄付文化の創造―

渡辺一城

地域福祉とは、地域住民が主体となり、お互いに支え合いながら、それらが抱える生活問題を解決し、地域の中で自立生活を営むことができるようなコミュニティとそのシステムをつくること、ということができるだろう。様々な地域課題が山積する中で、これらに対応できる地域福祉の方法や仕組みを改善し開発していくことが求められている。とくに、この活動基盤となる資金として、また住民参加あるいは社会貢献の方法として、「寄付」が注目されている。こんにちでは、コミュニティや社会をより良くしていくために新たな「寄付文化」を創造していくことが求められている。

本連載では、地域福祉の視点を踏まえつつ、この「寄付」に着目し、その考え方や理論、方法、仕組み、今日的動向などを概観しながら、地域福祉を拓いていくために、寄付がいかなる意味をもち、どのような役割を果たしていけるのか、地域福祉と寄付との関係性を明らかにしていきたい。

現代宗教と女性

金子珠理

宗教研究にとってジェンダーの視点は、非本質的で偏狭なものではない。むしろ宗教は社会や文化の一部であるから、ジェンダー(社会的・文化的な性のあり方)と不可分の関係にある。宗教をジェンダーの視点で捉え返すことは、宗教を批判的に評価するばかりではなく、平等や解放をめざす宗教の可能性を開くことにつながるはずである。その際には、これまで周縁的な位置にあった「女性」の視点（経験）を重視することが求められる。

連載執筆者の紹介

藤原　理人（ふじわら　まさと）

京都大学文学部国史学科（現日本史学科）卒業、リヨン第三大学修士号取得（宗教史学）、博士課程中退。天理教リヨン布教所長、天理教ヨーロッパ出張所役員、天理教ヨーロッパ布教推進委員。観光ガイド、通訳、翻訳業をフリーランスで行う。またパリ天理日仏文化協会で日本語教師を経て現在私立オンブローザ中高一貫校（リヨン）で日本語教師。

渡辺　一城（わたなべ　かずくに）

日本社会事業大学社会福祉学部卒業、同大学大学院社会福祉学研究科修士課程修了。社会福祉法人中央共同募金会、茨城キリスト教大学を経て、現在天理大学人間学部人間関係学科社会福祉専攻准教授。このほか、奈良県社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会委員長、奈良県共同募金会配分委員会委員長、天理教ひのきしんスクール運営委員、天理教社会福祉研究会委員など。

「出前教学講座」申し込み受付

おやさと研究所では教区、教会などの単位で「出前教学講座」の依頼をお受けしています。詳細は、担当者佐藤孝則（tasato@sta.tenri-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。